

「私たちに罪と救いとを教えて下さる御聖霊」

ヨハネ16：7－11

堀田修一 25・6・8

本日は、御聖霊がこの地上に降臨されたペンテコステ（五旬節。過越しの祭り〈主の十字架〉から50日目）です。神の御計画の日に、主が私たちの罪の為に十字架で死なれ、神の御計画の日に、御聖霊が世に降臨された。歴史は神の偉大なご計画により動いている。人に隠され、すぐには理解できない事も。

I 「しかし、わたしは真実を言います。私が去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主（ご聖霊）を遣わします」：7。

1. 御子が受肉し、十字架で死に、復活され、40日、地上で神の国の事を語られ、昇天され、10日後に御聖霊がこの世に遣わされ、ユダヤ人も異邦人も差別なく可視的教会の中に導き入れられ、キリストの救いが世界中に拡大して行くということは、人の為に神がなされた永遠の御計画です。聖霊が下られ、世界中で見えない形で臨在されることが益になるとは、復活の主が、見える形で肉体を持って臨在されるよりも、はるかに良いということ。主が復活後、そのまま弟子たちと共におられ、今も目に見える肉体で地上におられたなら、私たちが主にお会いしようと思えば、どうしてもビザを取ってイスラエルにまで行かなければ主にお会いできなかった。主イエスが肉体をもって地上におられる限り、主との交わりは空間的・時間的な制限を持つものになった。

2. しかし、主が天に昇られ、主の御業を続けて下さる別の助け主として来て下さる御聖霊は同時にどこにでも臨在され私たちと交わって下さる。キリストが昇天され、神の右の座に着き、救いを求める人々のため大祭司として、とりなし、主の再臨まで、聖霊を送られた教会と共におられるほうが、主が地上で公に3年間、制限された一ヶ所に共におられたことよりも、はるかに益だったのです。

3. 人間的な思いは、キリストをこの地上に留めて置いて、パレスチナで共に飲食をし、歩かれるほうが主が目に見えるし、良いと考えやすい。しかし、人間の魂にとっては、キリストがその御業を終えられ、天に上り、父の右の座においてその務め（真の大祭司として、人々のためにとりなし、神と人の仲介）を果たされ、教会と世界に聖霊を送られる事の方が、はるかに勝る事、益となる恵みです。

II 「その方（助け主である御聖霊）が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにします」：8。

1. 旧約時代も、御聖霊は、神に仕える特定の人々に、個別に働かれ恵み、力を与えられた。この8節の「来る」という意味は、ペンテコステの日に、全人類の上に大きな力と影響力を持って「来られる」ことを意味する。その影響力は、旧約時代よりもはるかに強力であったが故に、

主は「来る」と言われた。

2. 「その方（助け主なるご聖霊）が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにします」：8。私自身、御聖霊が私の心に働き明らかにされなければ、「罪、義、さばき」とは何か、全く理解できなかった。「罪・義・さばき」がある事自体も全く分からなかった。

①「罪について」。罪とは、原語で「的外れ」の意味がある。私たち人間は、神、主を信じなくても、自分の力で生きていけるという「的外れ」の高慢な罪の心を持っています。「神である主を信じ頼らなくても自分の力で生きていける」という考え、思い、心が根本的に的外れであり誤っています。「この世で自分の力で生きている人は、一人もいない」。自分の命、何かをする能力を下さっているのは、すべての創造主なる神、主である。私たち人間は、その根本的恵みを認めず、神に感謝もしない。「神を神として崇めず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです」（ローマ1：21）。「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです」：9。

②「義について」。義（神に受け入れられる真の正しさ）とは、人間が善行を積んで認められる義ではなく、私たちの全ての罪の為に十字架で血を流し死に罪を償い、復活された主イエスを信じる信仰により神に罪を赦され受け入れられる義です。「義についてとは、わたしが父のもとに行き（主が十字架で死なれ復活され、天に昇り、御父のもとに行き、御父の右に座し、主を信じ義と認められる人々の為にとりなしをしておられる）、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです」：10。「神は、あなたがたが木（十字架）にかけて殺したイエスを、よみがえらせました。神は、イスラエルを悔い改めさせ、罪の赦しを与えるために、このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられました。私たちはこれらのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊も証人です」（使徒5：30-32）。

③「さばきについて」。「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです」：11。神から遣わされた義なる主イエスが、徹底的に世から憎しみと呪いを受けて人類の罪の為に十字架で殺されるのは、一番恐ろしい悪魔的な仕業、悪魔の勝利だと思われています。しかし、主の十字架は、神の深い御計画で、主が十字架で血を注がれ死なれ、永遠のいのちによみがえられることによって、悪魔の最後の武器である死が力を失い、悪魔はさばかれたのです。つまり、悪魔は、主が私たち人間の罪の為に十字架で死に、よみがえることを阻止したかったのです。主が「多くの苦しみを受け、殺され（十字架で）、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた」時、ペテロが主をわきにお連れし「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません」といさめ始めた。しかし主はペテロに言われた。「下がれ、サタン」（マタイ16：23）。先週、平吹師を通して語られたように、悪魔は、主が十字架で私たち人間の罪の為に死なれ「罪の赦しと永遠のいのちを与える真の救い主」になって欲しくなかったのです。世的な英雄としてローマの圧政からの救い主に止まって欲しかったのです。そうすれば、この2千年間、真に魂の救いを受ける人は、一人もいなかったのです。しかし今、人の目に敗北、みじめに見える主の十字架が真の救いの成就であり、聖霊がその真理を教えられ多くの人に真の救いを与えられているのです。主の再臨の時に、悪魔は決定的にさばかれます。黙示録20：10。ハレルヤ！私たちの人生でも、敗北、マイナスに思える事も神は益とされます。ローマ8：28。

3. 主を信じる信仰、聖化、色々な助けを下さる素晴らしい聖霊なる神

- ①礼拝の最後のⅡコリント13：13の祝祷の意味。「聖霊の交わり」とは、聖霊が生み出して下る神との交わり、私たちの心との交わり、兄弟姉妹との幸いな交わり、世の人々に主を証しする交わり。
- ②主を信じ洗礼を受けた後も、聖霊は、私たちの罪を示され、神に立ち返る罪の告白、赦し、悔い改めに導き、日々、主の姿に変え続けて聖くし、愛を注ぎ続けて下さる。Ⅰヨハネ1：9。ローマ5：3－5。
- ③聖霊は、私たちの心に「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制の実」を結ばせ続けて下さっている。ガラテヤ5：22，23。私たちは、自力で、これらの良い実を結べません。しかし、失望しないで下さい。私たちが祈り求める時に、聖霊が、これらの実を心に生み出して下さいます。証し。
- ④私たちは、この世では、失望、悲しみ、苦しみが多くあり、痛みを理解し心に寄り添う慰め、励ましを必要としています。聖霊は、私たちの助け主（原語：そばに呼ぶ、優しい言葉をかける、慰める、励ます主）、寄り添い励ます慰め主です。「神は、どのような苦しみの中でも、私たちに慰め（原語：聖霊が「助け主」の動詞形）てくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰める（寄り添う）ことができます」Ⅱコリント1：4。証し。祈り。応答賛美。